

葬儀業界が作る博物館

—National Funeral Museum UK (ロンドン) と Museum für Sepulkralkultur (カッセル) から

宮澤 安紀

博物館とは、モノや資料を収集、保存、調査研究する場所であると同時に、展示を通じて訪れる人々にさまざまな学びや楽しみを提供し、知識を普及させていくメディアとしての役割を果たす¹。本報告では葬送文化を専門に扱った博物館を取り上げることで、博物館というメディアを通じて、死や葬送文化について広い層の人々に伝達しようとする取り組みを具体的に報告する。

葬送文化博物館

国内外を見渡してみても、葬送文化を専門に扱った博物館の数は多くない。もちろん、全国各地の様々な博物館や資料館には、墓の遺構、骨壺、人骨、墓標、仏壇、位牌、遺品など、死に関わる展示が行われることも多いが、それらは考古学や史学、民俗学、美術、宗教学等の文脈のなかに断片的に織り込まれており、葬送文化それ自体を独立したテーマとする単体の展示は、企画展として実施されることはあっても、常設として見かけることは少ないようである²。本報告では、このように事例の少ない葬送文化を主題とした博物館を運営する海外の 2 カ所の施設について、その概要や展示品の傾向を掴むとともに、こうした博物館が運営される背景について考察していく。

なお、ここで言及する葬送文化とは、さしあたり死に対峙する際に人間が生み出すもの全般——すなわち、死をめぐる風習や慣習、儀式、芸術、法律、社会制度、祭祀用具や遺体処理の道具などのモノ、等々、人々の死に対する態度を伝える幅広い文物を想定している。したがって、古代の埋葬法や祭祀を中心に扱う考古学的な知見に基づく展示や博物館も広い意味では含まれ得るが、本稿では特に、現代の葬送文化に至るまでの視点を備えた施設を「葬送文化博物館」として記述する。また、人の死に関わりはあるが、文化と言うよりも人骨や人体に焦点を当てた博物館³は、ここで言及するところの「葬送文化博物館」には含ま

¹ 博物館とはどのような機能を持つ施設であるのかについて、今村信隆（2017）は国際博物館会議（ICOM）による 2007 年の定義なども踏まえながら、それらを(1)収集、(2)保存、(3)調査・研究、(4)展示・教育の 4 つにまとめている（今村信隆 2017『博物館の歴史・理論・実践 1：博物館という問い』京都造形芸術大学東北芸術工科大学出版局藝術学舎）。

² こうした視点については、国立歴史民俗博物館の山田慎也氏より大きな示唆をいただいた。なお、氏が勤務するこの歴博では、「民俗」をテーマにした第 4 展示室が 2013（平成 25）年 3 月にリニューアルされた際に「死と向き合う」というコーナーが設けられ、葬列の様子や死者供養の棚飾り、供養絵額、手元供養品など、葬送文化を扱った展示が常設されるようになった。

³ 例えば医学的な知見から実際の遺体や部位を展示する博物館（例：バンコクのシリラート博物館、ロン

ないものとする。

葬送文化博物館の事例①National Funeral Museum UK (イギリス・ロンドン)

National Funeral Museum UK (イギリス葬儀博物館) は、ロンドン東部のベクトンに位置する小規模な博物館である⁴。この博物館は、1881年創業の老舗葬儀社 T. Cribb & Sons のシニア・パートナー (調査時点) であるジョン・ハリス (John Harris) 氏によって1990年代に開館された私設博物館である。イギリスには他に類似した博物館は、ハリス氏によっても、また筆者の管見の限りも見当たらないため、イギリスで唯一の葬送文化博物館と言って良いと思われる⁵。ただし博物館とは言っても、実際は T. Cribb & Sons のオフィスとなっている建物内の複数箇所に展示スペースを設ける形をとっており、独立した施設を持っているわけではなく、表にも「博物館」の文字はなく葬儀社の名前だけが掲げられている (写真1)。2024年10月現在、公式 web サイトでは月曜日から金曜日までの9時から17時開館となっているが、見学には事前の予約が必要であり、自由に立ち寄ることはできない。入館料は、ガイドも含めて無料である。

ハリス氏への聞き取りによれば、この博物館はハリス氏の個人的な関心によって作られたという。曾祖父が19世紀に創業した葬儀社を現在も家族で経営する一員として、葬儀に関するかつての風習や文化が風化し、失われていくのを防ぎたいという気持ちがその動機にはある。T. Cribb & Sons はイギリスの葬儀社でも珍しく、かつての葬列の際に使用されていた葬列用の馬車 (carriage) と馬を保有し、現在でも葬儀の際のサービスとして提供しており⁶、そうした葬儀社自体の歴史や特性も影響していると思われる。ハリス氏自身は学生時代に葬送文化を専門的に学んだわけではないが、社会人として働き始めてから自身の関心を元にレディング大学の「死と社会」コースに進み、社会学者の T・ウォルター氏の指導なども受けながら2000年に修士号を取得している。

博物館の登記自体は1995年に行なっているが、現在のような形での展示が実現したのは、2020年に現在のオフィスが入っているベクトンの建物が完成したときだという。建築の際、展示スペースも含めた内装にして、これまで外に出さずに保管されたままだった多くの

ドンのハンタリアン博物館など) や、世界各国で開催されているプラスティネーション技術を使った「人体の不思議展 (Body World)」など。

⁴ この博物館への訪問は2024年10月25日に行なった。

⁵ イギリス国内には他に、棺の部品メーカーとして1990年代まで営業していた Newman Brothers 社の工場を再利用した博物館、Coffin Works がバーミンガムにあり、筆者も2019年にガイドツアーに参加したことがある。なお、T. Cribb & Sons と同じく葬儀社が運営する博物館がロンドンのファリンドンに2018年6月にオープンしたという情報もあったが (<https://www.ianvisits.co.uk/articles/londons-museum-of-funeral-history-24532/>, 2024.11.04 最終閲覧)、筆者が2024年10月に同住所を訪れた際は葬儀社自体が閉業したようでそれらしい施設は見つからなかった。

⁶ T. Cribb & Sons の HP によれば、現在の馬車を使った葬儀サービスは1980年代に再導入したものだという。 (<https://www.tcribb.co.uk/vintage-motor-horse-drawn-hearse-hire/>, 2024.11.04 最終閲覧)。

コレクションを一度に展示できるようにした。筆者が案内された範囲では、コレクションは全て 2 階にあるハリス氏の個人オフィス、応接室の展示棚や壁スペース、またそれらの部屋をつなぐ廊下の中央に置かれた巨大なガラスケースと、それを囲む壁スペースなどに分散して展示されていた（写真 2, 3）。

コレクションのほとんどはイギリス国内のもので、年代はおおよそ 17～20 世紀頃のものが多い。コレクションについては、自社が保管していたものに加えて、ハリス氏がアンティークショップやオンラインで購入するなどして収集しているという。もっとも目立つ廊下中央のガラスケースには、18～19 世紀の喪服、喪中時の宝飾品 (mourning jewelry, mourning ring など⁷)、棺型の嗅ぎタバコ入れ、緻密な意匠の葬儀の招待状や葬儀後に配られるメモリアルカードなど、目を惹くものが展示されている。応接室の収納棚には、主に 19～20 世紀にかけて作られた葬儀社のカタログ、トレードカード⁸、風刺画、ポストカードなど、葬祭業に関わる歴史的な紙資料を中心に展示や解説が並べられている（写真 4）。王室メンバーが亡くなった際に頒布された記念品や、なかには 1901 年に行われたヴィクトリア女王の葬儀にかかった費用が記された元帳 (ledger) など、王室に関わる歴史的に貴重な資料も保管されている。廊下や応接室の壁スペースには、葬儀や埋葬の場面を捉えた絵画や忌中紋標 (funerary hatchment) が飾られている。当時の人々がどのようなモノを使って葬儀を行い、死者を偲んでいたのか、収蔵品を通じてその様子や風習を現在でも窺い知ることができるようになっている。

なお、この博物館では調査時点から 3 年ほど前よりフルタイムのキュレーターを雇用しており、展示品の解説パネルの作成や来場者の案内などは彼女が担当していたという。しかしながら、半年前に彼女が別の場所で就職したためにここでの仕事を辞めてしまい、それ以来、来場者の案内などの博物館業務はハリス氏が引き受けざるを得なくなった。もちろん後任は探しているが、前任者があまりに優秀だったため、それに代わる人材をなかなか見つけられないという。ハリス氏は T. Cribb & Sons でも要職に就いていることから、本業と博物館業務の両立は難しく、筆者を案内中も何度も仕事の電話に出る時間があった。しかしそのような激務のなかでも、たった一人の訪問者である筆者のために 1 時間以上を費やして展示品の解説をしてくれたのには、葬祭業に携わる者として、イギリスで唯一の葬送文化博物館を運営することで、葬送文化を通じて多くの人に死を考えるきっかけにしてほしいという、ハリス氏個人の強い情熱があると言わざるを得ない。

⁷ これらの装飾品にはしばしば故人の毛髪が収納されたり、毛髪自体で意匠が作られたりした。

⁸ 自らのビジネスを宣伝するために配布されたカード。現在の名刺よりもサイズが大きいものが多く、しばしばイラストなどととも店名や住所が載せられた。



(写真1) イギリス葬儀博物館 (T. Cribb & Sons) の入り口外観。



(写真2) 2階の廊下中央に置かれたガラスケースに飾られているヴィクトリア朝時代の喪服。



(写真3) 応接室の展示の様子。



(写真4) 葬儀社のトレードカードのコレクション。

葬送文化博物館の事例②Museum für Sepulkralkultur (ドイツ・カッセル)

Museum für Sepulkralkultur (埋葬文化博物館) は、ドイツのヘッセン州カッセル市に位置する博物館である⁹。公園や住宅街に囲まれた静かな通りに溶けこんだ、落ち着いた佇まいの外観をしている (写真5)。

この博物館は登録社団法人の Arbeitsgemeinschaft Friedhof und Denkmal (墓地と記念碑研究グループ) を母体とし、歴史家の Hans-Kurt Boehlke 氏 (1925-2010) の尽力によって 1992 年に開設された¹⁰。この墓地と記念碑研究グループは、20 世紀初頭のドイツ墓地改革を担った人々により "Reichsausschuss für Friedhof und Denkmal" として 1921 年に誕生し、戦後の 1951 年に現在の名称で設立され直してからも、絶えず変化する社会のニーズを考慮

⁹ この博物館への訪問は 2024 年 10 月 27 日に行なった。

¹⁰ なお、この博物館に関しては、すでに田村和彦がオールスドルフ墓地付設博物館と上海殯葬博物館とを併せた訪問記を執筆している (田村和彦 2013 「ドイツ、中国における死に関する博物館めぐって——Museum für Sepulkralkultur, Ohlsdorf 墓地付設博物館, 上海殯葬博物館を訪問して」『白山人類学』16 号、133-137 頁)。「墓地と記念碑研究グループ」の訳はこの田村 (2013) に拠る。

しながら、葬送文化のさらなる発展を促進し続けることを義務として活動している¹¹。この研究グループには地方自治体や教会コミュニティ、葬儀社、石材店、葬具用品店、墓地管理団体、グリーフサポート団体、建築事務所、映像制作会社など、様々な分野の死にかかわる企業や団体、および研究者、学生やアーティストなどの個人が会員として所属しており、その数は2019年の時点で600を超えるという¹²。まさにドイツの葬送文化を研究し、保存し、発展させる一大拠点としての機能を担っており、埋葬文化博物館はそうした活動の一環として運営されていることがわかる。

この博物館は火曜日から日曜日までの10時から17時に開館しており（水曜日のみ20時まで）、先ほどのイギリス葬儀博物館とは異なり、予約なしでいつでも入館できる。入館料は2024年10月時点で大人ひとり8ユーロ¹³。ガイドツアーを利用する場合は、通常ひとり60ユーロか90ユーロの料金で60分か90分のツアーに参加できる（週末・祝日料金は割り増しになる）。基本はドイツ人向けにドイツ語のガイドツアーが提供されるが、追加で15ユーロを支払うことで、英語などのドイツ語以外の言語でもツアーを利用することができる。

施設としては、エントランスのある1階に受付とミュージアムショップ、カフェ、特別展示室があり、主な常設展示は階段を下った地下1階部分にある（写真6）。展示品は主に中世から現代までのコレクションを幅広く扱っている。同施設を訪れた田村和彦（2013）によれば、博物館の名称となっている“Sepulkralkultur”とは、ラテン語で埋葬や墓を意味する“sepulcrum”と文化の意の“kultur”を合わせた造語であるとされ、実際に常設展示室の入り口付近に掲げられた案内版にも示されているように¹⁴、決して墓や墓地のみを対象にしている

¹¹ Reiner Sörries(ed.) 2002, *Vom Reichsausschuss zur Arbeitsgemeinschaft Friedhof und Denkmal: Kolloquium Am 8. Und 9. November 1996 Veranstatet Vom Zentralinstitut Für Sepulkralkultur, Kassel*, Schnell & Steiner.

¹² „membership,“ <https://www.sepulkralmuseum.de/EN/society/study-group-cemetery-and-monument/membership:members>, 2024.11.04 最終閲覧。法人の場合は年間100ユーロか150ユーロ、個人の場合は年間50ユーロの会費がかかる。

¹³ ただし、団体料金や家族チケット、年間チケットなどさまざまな割引オプションが用意され、さらにカッセル大学の学生や6歳以下の子ども、墓地と記念碑研究グループの会員、ICOM会員、ウクライナからの難民などは入場料が無料となっている（<https://www.sepulkralmuseum.de/EN/visit>, 2024.11.04 最終閲覧）。

¹⁴ 全文は以下の通り（英語版の記述を参照）。「死にゆくことや死の文脈における様々な側面を含む sepulchral culture（ラテン語：Sepulcrum）という言葉に基づき、「死にゆくこと」「死」「葬儀」「喪に服すこと」「追悼」のセクションでは、人の死後における行動の軌跡を追っている。／この展示は、かつて人々が死とどのように向き合い、死に対してどのような準備をしていたのかという疑問を投げかける。葬儀はどのようなものだったのか、人々は悲しみをどのように表現し、故人をどのように追悼したのか。／これらの側面は、コレクションによって説明され、現代アートやプロダクトデザインによって補完される。こうして、埋葬文化のある変化が明らかになるとともに、「死にゆくこと」と「死」に対する考え方の変容も明らかになる。／過去と現在の埋葬文化を発見する興味深い時間をお過ごしください！」

のではなく、広く死に関わる展示を行なっている。

地下 1 階の室内には死を象徴した彫刻や絵画、宗教用具、葬儀業者が用いるエンバーミングや死化粧のための道具、貴族が用いた豪華な棺やそれとは対照的にシンプルなデザインのモダン棺、喪服や死者を悼むための装飾品、死を主題とした現代アート作品など、様々な領域にわたるコレクションが展示されている（写真 7）。また、1 階との吹き抜け部分の展示スペースには、さまざまな意匠の墓碑、骨壺、霊柩車など、埋葬に関わる展示品が配置され、特に墓地に関する解説が充実している（写真 8）。収蔵品はドイツ語文化圏を中心として主に中世から現代までのものが扱われており、過去の遺物だけでなく、現代の死にかかわるアート作品や現代の工業製品も並列して展示することで、人々の死に対する態度の変化や多様性を伝えようとしているのが特徴的である。例えば「埋葬布・死装束 (shroud)」のコーナーでは、現代の人々が死を恐れるのとは対照的に、過去の人々は自分たちで棺や埋葬布を用意したと説明する一方、葬儀社が販売する遺体に着せやすい背中の空いた製品としての死装束や、白色でポケットをつけないとされている伝統的な死装束のあり方への抵抗を込めて、黒色かつポケットをたくさんつけたアート作品としての死装束などを展示している。

なお、常設展については、博物館の公式 web サイトに博物館内部を自由に探索できるストリートビューが設けられており、どこからでも気軽に展示を見学できるようになっている（ただし、筆者が実際に見学した際のレイアウトと多少異なっているようである）¹⁵。

¹⁵ “Permanent Exhibition,” <https://www.sepulkralmuseum.de/EN/exhibitions/permanent-exhibition>, 2024.11.04 最終閲覧。



(写真5) 埋葬文化博物館の入り口。



(写真6) 入り口付近から内部を撮影した様子。地下1階が主な展示スペースとなっている。



(写真7) 中世の棺と一緒に、現代的なデザインの棺も展示されている。



(写真8) 吹き抜けの墓碑展示スペースは外からの採光を取り入れて屋外の雰囲気演出している。

なぜ葬送文化博物館が営まれるのか？

最後に、イギリスとドイツにおける二つの葬送文化博物館の事例から、葬送文化博物館がオープンされる背景を簡単に考察する。この二つの博物館は、それぞれ規模も運営形態も異なるが、これらの事例からは、業界に携わる団体や個人が運営の中心となって葬送文化に関する博物館が営まれていることがわかる。この背景には、葬儀業界に（ときには長年）携わる人々が葬送文化に関わる物品・資料、そして知識を保有する立場にあったことに加え、死にまつわる様々なモノや風習、知識を保存すべき「文化」として提示し、死を扱う自分たちの仕事に対する理解を社会に広めようとする意図も読み取れる。例えばイギリス葬儀博物館のハリス氏も、埋葬文化博物館のガイド役も、「死の話題は一般的に避けられている」ということを度々口にし、だからこそ、人々が死について話し、考えることを促すという葬送文化博物館の果たす意義を強調していた。

ただし、それでは業界の人々が葬送文化博物館を運営するにふさわしい主体なのかとさえ言えば、単純にそうとも言えず、課題は多くあるように見える。たとえばイギリス葬儀博物館

の場合、家族経営の葬儀社が運営する小規模な個人博物館であるが、それでも T. Cribb & Sons はロンドンとエセックスに 17 の支店を持ち、最近ではアフリカにも支店を立ち上げるなどかなりの大手であると見られ、それなりの資本力に支えられ博物館が維持されていると考えられる。さらに博物館においては、博物館の機能を果たすために必須である学術的な知見を備えたキュレーター等の専門家が常駐することが望ましいが、イギリス葬儀博物館の例にも見られるように、適切な人材の確保は一筋縄にはいかないだろう。一方、カッセルの埋葬文化博物館の場合は、墓地と記念碑研究グループという非営利組織を中心として様々な専門を持った団体や個人が相互に連帯しつつ、博物館の活動が活発に行われている。このような組織の力に支えられ、入館料だけでなく、複数のガイドを雇用することでガイドツアーによる収入もあり、安定した運営が行われているように見える。しかし、このような利害関係を超えた大規模な業界の組織作りは一朝一夕で行えるものではなく、このモデルがほかの国や地域でも実現できるかどうかは予測がつかない。

本報告ではわずか 2 つの事例しか取り上げていないが、全体的な数が少ないとは言え、世界各地には他にも様々な葬送文化博物館があり、それぞれ独自の運営母体や運営意図を持っていると考えられる¹⁶。来年度も引き続きそうした博物館を訪れ、葬送文化への理解を広めるメディアとしての博物館がいかに運営されているのかを考察していきたい。

付記：カッセルの Museum für Sepulkralkultur については、国立歴史民俗博物館の山田慎也先生から貴重な助言をいただき訪問が実現しました。ここに記してお礼申し上げます。

¹⁶ 例えば有名なところではオーストリア・ウィーンにある Bestattungsmuseum am Wiener Zentralfriedhof や、アメリカ・テキサス州の National Museum of Funeral History、また田村（2013）にも記述がある中国・上海市の上海殯葬博物館などがある。近年では、シンガポール西部にある仏教テーマパークのハウパー・ヴィラ園内に、シンガポールの華人文化圏を中心に世界各地の葬送文化を扱った Hell's Museum がオープンしている。